

④ 武士の台頭と農業の発達 〜中世の日本〜

今度はどこに出たんだろう？



ミーとトラが
やってきたのは
貴族や寺社が
莊園を^{しやうえん}広げ
朝廷の支配が
及ばなくなった時代



この頃
口分田^{くぶんでん}から租税^{そぜい}を
集める仕組みが
完全に崩れました。

誰でも
鉄の農具が使える
おかげで開墾も
ずいぶん
楽になったな



どんどん
新しい田んぼを
開いて
米をたくさん
つくるぞ！

この頃になると
台地、山地や
谷などまで
開発が進みました。



関東などの東の地域では、
自然の湿地や
湧水^{ゆすい}によるかんがい^{かんがい}を
利用[※]して谷地田^{やちだ}を
拡大改良し、
これらを自らの
保有地として付近に
武士団が住み着くところ
がありました。



※「谷地田」は山間の小さな谷^{ひら}を拓いてつくられた水田のことです。

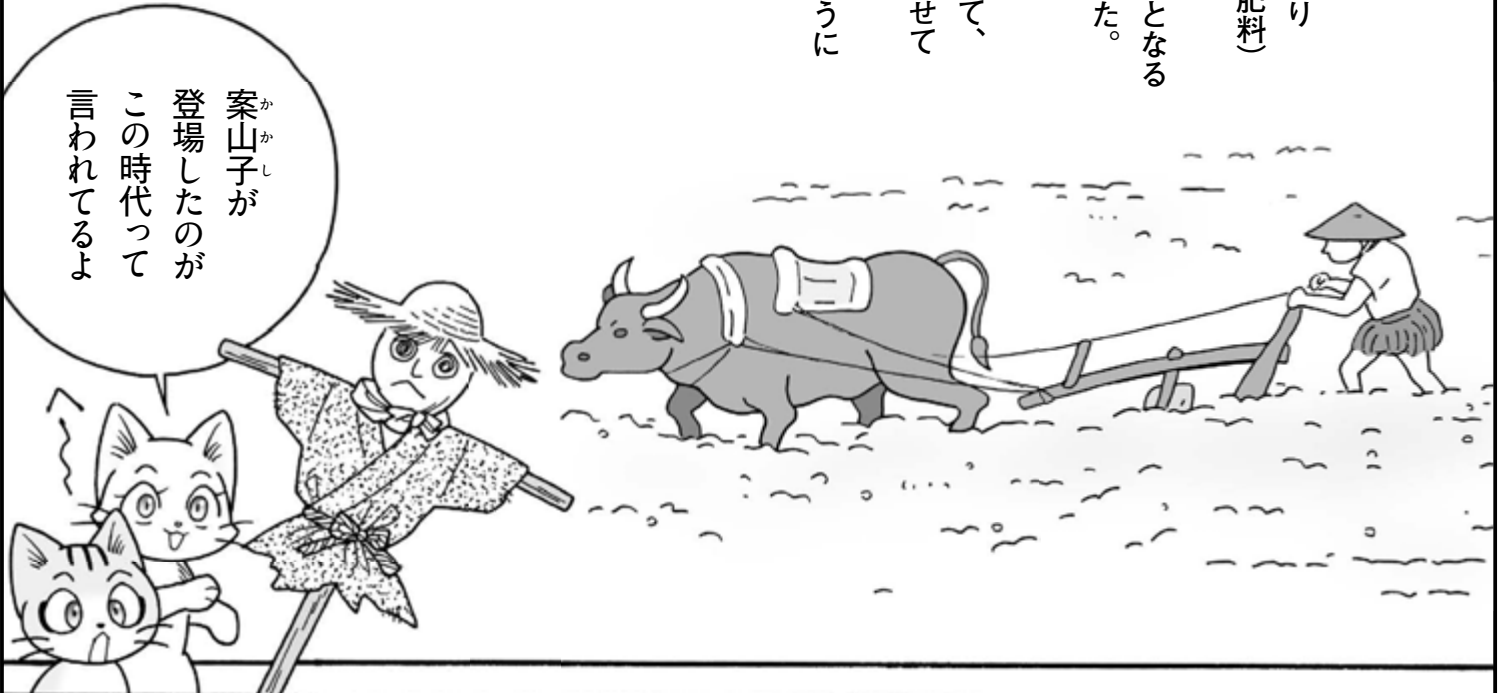


伝源頼朝像

武士団を率い
鎌倉幕府を開く
源頼朝は
関東の武士たちを
「御家人」として
主従関係を結び
守護と地頭を
全国に配置しました。
こうして武士が
富と権力を持つ時代に
移ったのです。

注1 代かき・田んぼに
張った水と土を混ぜ合わ
せる作業
注2 苗代…一度にたく
さんの種を発芽させ、稲
を田んぼに植ええられる大
きさまで育てる場所

この時代、
代かき、
牛馬耕、草木灰(肥料)
二毛作など、
現代の稲作の原型となる
農法が始まりました。
早乙女が並び立って、
音楽(田楽)に合わせて
田植えを行う
風景も見られるようにな
りました。



豆知識 串に刺した食べ物の「田楽」は、その形が田楽法師(田楽を舞うのを業とする法師)に似ていることに由来。「おでん」の語源も同じ。
(出典元：文化デジタルライブラリー)



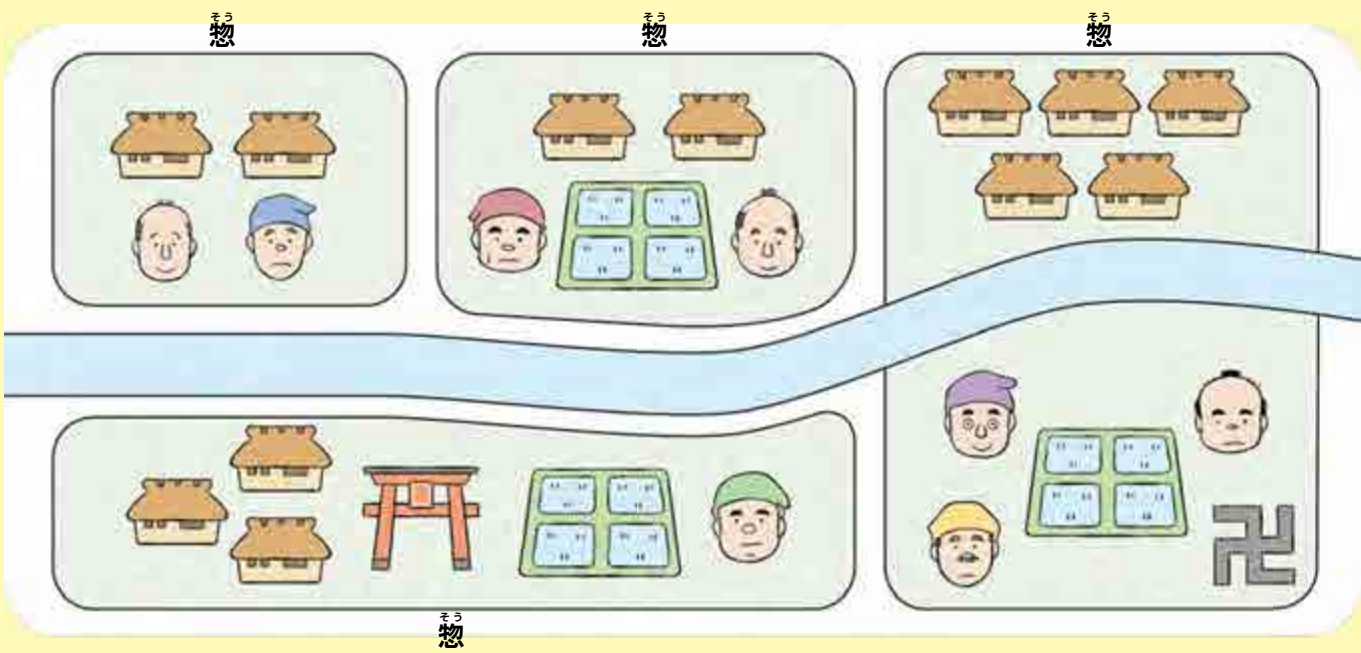
民俗芸能「田楽」についての
サイトが見られます。



惣(惣村)の仕組み

動乱の世になると、農民たちは自分たちや農地を守るために自治組織をつくりました。
それが「惣」です。惣は強い連帯感で結ばれていました。共同で農作業をするほか、
用水路や農作業に必要な山や野原(入会地)の管理、荘園領主に納める年貢を
ひとまとめにする地下請、年貢の割り当て、祭祀の運営など、
惣が主体となって行われるようになりました。

解説



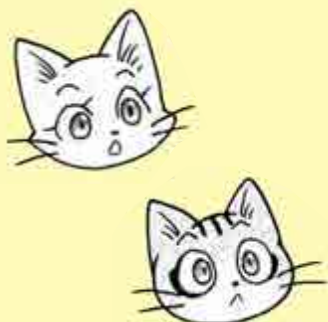
※「悪党」は、現代語の「悪人」の意味とは異なり、領主や幕府の命令や規則に従わず、武力を背景に荘園の利害の解決等を図る集団のこと。鎌倉幕府の打倒に貢献した楠木正成も悪党出身といわれています。

村々の水争いと水利秩序

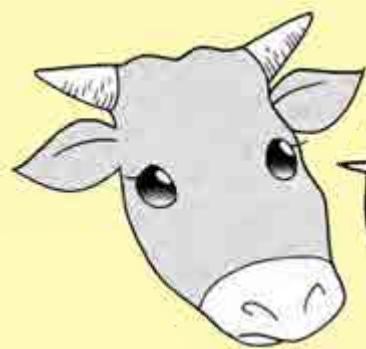
農民たちは寄合で掟を定め、水管理や祭りの運営などで結びつき、連帯意識を強めました。



いまぼりそうおきてがきあん
今堀惣掟書案
(滋賀大学経済学部附属史料館 蔵)



村々にとって水を得ることは文字通りの死活問題であり、渇水時には水争いが頻発しました。このような水争いの度に、農民たちは何度も話し合い、水利秩序が各地で形成されたのです。



我田引水ではなく
限られた資源を
分かち合うことが
村では大切な



水争いの投石によって耳や口が
欠け落ちた門前狐
(志和稲荷神社)



(「大地への刻印」より)

水争いを経てできた水利秩序の例 一ノ瀬堰の加減石

佐賀県中原町の寒水川上流にある一ノ瀬堰では、加減石と呼ばれる2つの自然石を水路の中に配置することで微妙な分水量を巧みに調整していました。

滝名川の水げんか(岩手県)

岩手県の滝名川は、水量が少なく志和稲荷神社前で本流と支流に二分されるため、日照が続くと、いずれか一方の水系の者が徒党を組んで相手方の取水口を堰き止めてしまい、記録に残っているだけでも36回の水争いが発生しました。